

守屋淳編「渋沢栄一『論語と算盤』と現代の経営」、日本経済新聞出版社、2013 年 7 月 1 日刊を読む

日本企業はアジアのリーダーになるという気概を持って事業モデル、ビジョンを持つべきです

程近智

程： 経営者になると経営者仲間が増えるものです。私が参加する経済同友会のなかには 1300 人の経営者の方がいて、そうした経営者の方ともよく「努力する部分と運に任せる部分とのバランスをどのようにとっているのか」ということをお話しします。ですから、「論語と算盤経営塾」でも、そういった視点で自分が割り振られた「成敗と運命」を読みました。

守屋： 程社長のなかで、努力と運のバランスというのは、何か自分なりの結論は出されたのでしょうか。

程： (1)そのときはちょうど、あのスティーブ・ジョブズが亡くなったときでした。彼の死に遭遇して、あの人は果たして努力の人だったのか、運の人だったのか、改めて考えさせられました。彼は一度失敗をしたあと、再び戻ってきて大成功を収めた。でも、ピークのときに命を絶たれてしまう。彼は 7 年間、成功の裏で努力をしてガンと闘い生きたわけです。スティーブ・ジョブズの人生を見て、何が成功で、何が失敗なのかといったことに明確な定義はないのではないかと考えさせられました。

(2)このスティーブ・ジョブズには、2005 年スタンフォード大学の卒業式で行った「connecting the dots」という有名なスピーチがあります。彼はこのスピーチのなかでこのように言っています。

(3)「将来を見通して点をつなぐことはできない。これまでの歩みを振り返ってつなぐことしかできない。だから将来、何らかの形で自分が歩んできた点がつながると信じることだ」

(4) 要するに、まず一つの点(dot)、つまり目標に到達するために努力して没頭する。そしてその地点に到達したらまた次の点(dot)に向かって努力する。ある地点で振り返ってみると、それらの点と点が全部つながって線になり、面になっている。つまり、今目の前にある目標に向かって努力していくなかで、自分が進歩するために欠かせなかった方向性が見えてくる。私は自分の人生の歩みと重ねあわせました。

(5)つまり、なぜ、私がこのスピーチで考えさせられたかということ、私自身、人生を振り返ってみると、今まで「こうでなくてはならない」といった、絶対的なものがなかったからなのです。この会社に入ってから製造、金融、ビジネススクール、ハイテク通信業界と、さまざまな経験を積んできました。ある地点で見るとそれぞれは点にしか見えませんでした。後で振り返るとどれも必然性があり、自分の進歩には欠かせないものだといえるのです。

(6)「論語と算盤 経営塾」では、私たちのチームは、参加者に「connecting the dots」の考え方で人生の振り返りをやってもらいました。

(7)私もこの考え方で今後の方向性を定めたいと思っています。最近、渋沢栄一が 70 歳を越えて実業界を引退し、社会貢献やパブリックのことに力を入れていったような要素をもっと強めていかなければいけないと思っています。

守屋： 程社長の方向性というのは、最終的には社会貢献のほうに行きたいということによろしいでしょうか。

程： (1)社会貢献といってもさまざまな視点で捉えることができますので、今、まさに方向性を模索しているところです。どのように社会貢献活動していくか、という点で試行錯誤している企業も多いようですね。

(2)社会貢献活動とは、簡単に申し上げると、要するに企業の活動が社会のためになって、それがビジネスになって、社員、社会、それに株主に利益をもたらし、そうしたステークホルダーと良好な関係を築いていくこと—そういうストーリーを作るような「ソーシャル・アントレプレナー(社会的企業家)」とか、「ソーシャル・エンタープライズ(社会的企業)」といったものも最近は出ていますね。

(3)そもそも、社会貢献活動を突き詰めて考えていくと、資本主義というのは、一体どこまで利益追求していったらいいのかという考えに行きついてしまいます。日本企業は、一度ウォールストリート主義(株主重視の資本主義)にも傾倒して、その良いところも悪いところも理解しました。一方で、江戸時代には250年も鎖国をしたというまれな風土を持っている国であるという一面も持っています。このような日本の多面性をうまく反映して、社会貢献活動を推進していく会社が、これからもっと出来てくるのではないかと考えています。

P34 ~ 37

[コメント]

アクセンチュア代表取締役の程近智氏と本書の編著守屋淳氏との対話。程氏の企業と社会とのとらえ方はとても腑に落ちるものだ。渋沢栄一翁の「論語と算盤」を基盤にものごとを考えること、企業のあるべき姿がよく見えてくる。

— 2014 年 1 月 8 日 林 明夫記 —